

**継続的運用を可能とする日本語能力測定方法の研究**  
**—DLA を中心に—**

三重県教育委員会事務局 研修推進課テーマ研修班 研修員 佐藤 紀文

### I 研究の目的

文部科学省が開発したDLAにある人的・時間的負担の軽減とデータの活用方法について、先行事例を調べ、在籍校でのDLAや日本語指導の実践を通して、日本語能力測定の継続的運用について提案する。そして、この研究成果が各学校に参考、活用されることで、外国人児童生徒の教育の保障に資することを目的とする。

### II 研究の内容

#### 1 日本語教育

先行研究や文献収集、研究会等への参加を通して、外国人児童生徒の日本語教育には、以下の2点が重要であることが分かった。

- ・ 外国人児童生徒は目標達成のために、自分が何を学び、どのように学んでいるかをはっきりと理解できなければならない
- ・ 指導者は外国人児童生徒に何をどのように学んでほしいのか、また最終的にはどのような力が必要なのかという、指針あるいは学習のゴールを把握していなければならない

#### 2 DLAの概要

DLAには、

- ・ 1対1の対話式で行う。
- ・ 5つのアセスメントで日本語の4技能（話す・読む・書く・聴く）を測定する。
- ・ 日本語能力の測定でありながら日本語学習の場とする、ダイナミック・アセスメントという評価方法である。
- ・ 対話の中で、一人でできること、支援があればできること、現時点ではできないことを見極め、測定後の日本語指導や支援につなげる。

の4つの特徴がある。また、「普段からの観察による予測→アセスメント→分析」という評価手順になっており、日本語能力測定に必要な①対話による認知力測定、②言語理解や読解力測定、③集団におけるインターアクション能力測定、の機能を備えている。

#### 3 在籍校での実践

##### 《実践の概要》

DLAの人的・時間的負担の軽減による簡便性向上と日本語指導の充実を目指して、在籍校の外国人生徒を対象にDLAの実施、日本語指導、JSL評価参照枠の予測を行い、外国人生徒指導委員会で報告した。

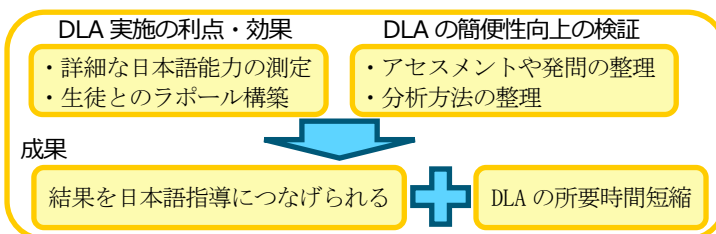
##### 《DLAの実施》

7名の外国人生徒にDLAを実施する中で、DLAの簡便性を高めるため、実施方法や分析方法について検証した。DLAを実施することで外国人生徒の日本語能力を詳細に測定できるとともに、生徒とのラポール（信頼関係）構築や生徒理解へとつながることが確認できた。

各アセスメントでの対話は、生徒の日本語学習での困り感や興味関心の発見につながり、その後の日本語指導の方針に役立てることができた。また、アセスメントや設問、分析方法を整理することでDLAの所要時間短縮とスムーズな実施が可能になった。

##### 《日本語指導》

日本語指導の実践では、DLAの結果をもとにした、該当生徒の日本語能力の弱み克服のための日本語



(様式4)

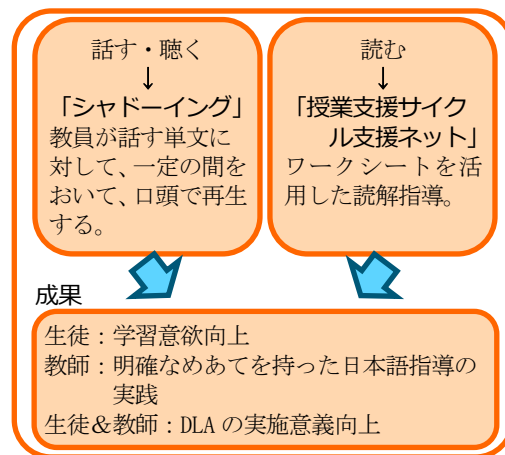
指導を行った。「話す」「聴く」の力が弱い生徒には「シャドーイング」という指導方法を実践した。「読む」が弱い生徒には三重県教育委員会作成の「授業改善サイクル支援ネット」にあるワークシート等を活用した読解指導を行った。どちらの実践でも生徒の高い学習意欲が見られた。このように測定を指導につなげることで、DLAの実施意義を高めることができた。

#### 《JSL 評価参照枠の予測》

DLA実施の対象生徒のうち2名については、DLAの実施前に4名の教員にJSL評価参照枠の予測を依頼し、実際のDLAの結果と比較した。予測とDLAの結果には大きな差はなく、普段の観察からある程度は日本語能力を見取ることができることが分かった。しかし、正確な予測に近づけるためには他の生徒のDLA結果という参考資料や、日本語能力に対する共通理解が必要であることが分かった。予測は短時間で済むため負担が小さく、教員間の課題意識や指導・支援方法の共有につながる期待ができる。

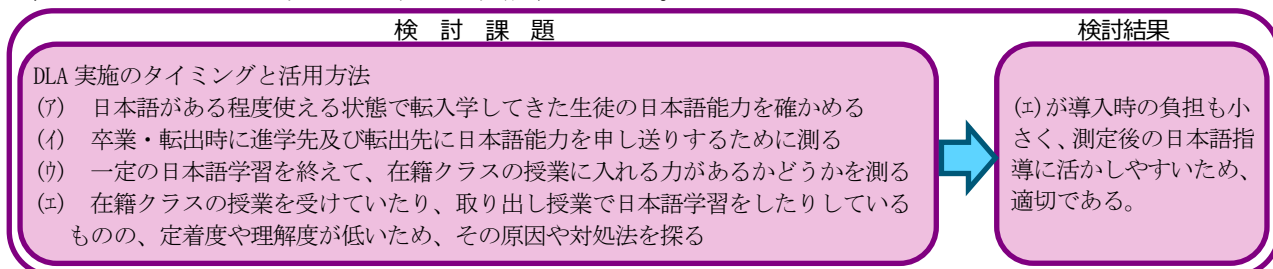
#### 《外国人生徒指導委員会》

DLAの結果を在籍校の「外国人生徒指導委員会」で報告するとともに、DLAの導入について検討した。DLAの結果については日本語能力の詳細な情報が得られるという評価を受けた。DLAをどのように実施活用するかという検討課題については、日本語学習や教科学習の中で、思うように結果が上がらなかったり、困り感を持ったりしている生徒について、その原因を探り、指導・支援につなげるという目的で導入していくことが適切であろうという結果になった。



生徒 I の JSL 評価参照枠予測と実施結果

生徒名	予測した教員	話す	読む	書く	聴く	全体
I	学年国際理解教育担当	3	1	2	2	2
	日本人適応指導員	2.5	1	1	2	2
	在籍学級担任	2	2	1	2	2
	タガログ語適応指導員	3	1	2	2	2
	平均	2.6	1.3	1.5	2.0	2.0
	DLA 結果	2.5	1.5	2	2	2



### III 成果と課題

成果として、次の4つを挙げることができる。

- (1) DLAによって外国人生徒の日本語能力を詳細に評価できた。
- (2) 発問やアセスメントを整理することで、スムーズな実施が可能になった。
- (3) DLAの実施結果を参考にすることで、ある程度は日本語能力の予測ができた。
- (4) DLAの結果を基に、生徒の日本語能力の弱み克服となる技能別日本語の指導方法の提案ができた。

(1)から(4)の成果により、DLAを継続的に運用するための提案ができたと考える。外国人児童生徒在籍校においては、本研究を参考にしつつ、各校の現状に沿った形でDLAを導入することを期待したい。

一方、課題としては次の3つが挙げられる。

- (1) 測定には該当生徒一名につき最大3校時、分析にもほぼ同時間必要であるという負担は否めない。
- (2) JSL評価参照枠の予測だけでは詳細な観点別評価はわからない。
- (3) 今後も、DLAの結果を活用した授業研究や教材開発を行い、提案していかなければならない。